

りそな外為レポート

りそな WEEKLY COLUMN

りそな外為レポート

「カモン平穏、リスクオン？」 (P2)

りそな銀行 市場トレーディング室
カスタマーディーラー 伊藤 一輝

今週のドル円予想レンジ **103.00 ~ 104.60**

りそなWEEKLY COLUMN

読者への挑戦IX ~ Money Never Sleeps ~ (P3)

関西みらいフィナンシャルグループ
ストラテジスト 石田 武

- 読者への挑戦IX
- 休日の歴史 日曜日の休日化と日本における“一六日”
- 祝日と市場流動性 “Money Never Sleeps”?
- 解決編

2020/12/1

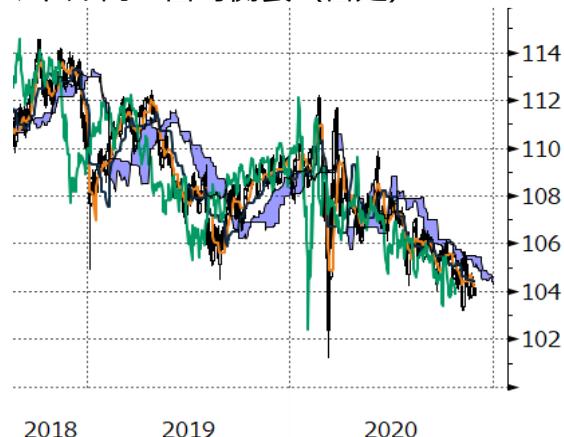
りそな外為レポート

「カモン平穏、リスクオン？」

今週のドル円予想レンジ **103.00 ~ 104.60**

(りそな銀行市場トレーディング室予想 発行当日の10時時点)

◆ドル円一目均衡表 (日足)



◆為替相場のすすめ

先週は週初の良い米国PMIが好感され、ドル円は一時104円70銭台まで円安が進むも、米株が上昇する局面ではドル安傾向が強まり、104円丁度付近までじり安となった。バイデン政権の財務長官最有力候補としてイエレン前FRB議長が挙がり、市場はプラス材料と捉えている様子。

景気刺激策の協議は目立った進展無い中、今週の注目ポイントはISM製造業/非製造業指数や雇用統計といった米国経済指標となりそうだ。都市によっては経済活動に制限が掛かっており、先月まで好調だった景況感もマーケットコンセンサスは「鈍化」が予想されている。ただし、NY時間12月16日にはFOMCを控えていることから、仮に指標が悪かったとしても追加緩和期待・ドル安継続に繋がるのでは、と個人的に見ている。

さて、米国では11月末から徐々に為替ディーラーたちが休暇入りする。果たして、年末までの1か月間の相場は「トウキ(投機・冬季)休業」の平穏な相場となるのだろうか。

(カスタマーディーラー 伊藤 一輝)

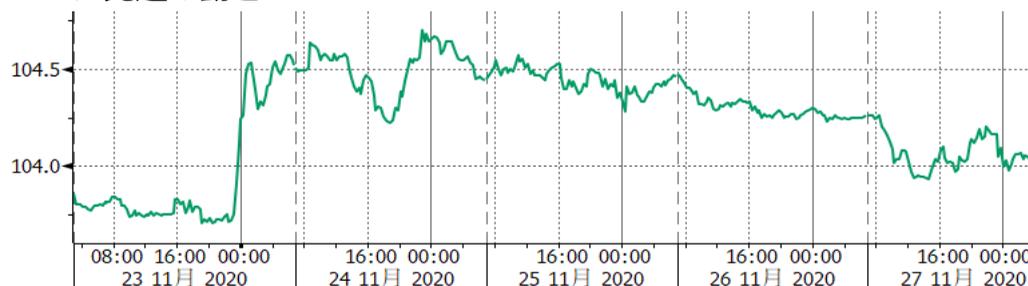
◆今週の日程

30日(月)日	10月鉱工業生産	2日(水)米	米地区連銀経済報告
30日(月)中	11月PMI	3日(木)米	11月ISM非製造業
1日(火)日	10月労働力調査	4日(金)米	11月雇用統計
1日(火)日	20/3Q 法人企業統計調査	4日(金)米	10月貿易収支
1日(火)米	11月ISM製造業	5日(土)日	臨時国会会期末

◆今週の予想 (ドル高 強い ↑ 普通 ↑ ドル安 強い ↓ 普通 ↓) NY引け値 11月27日(金) 104.09円 VS 12月4日(金)

東京										大阪			埼玉				
井口	中根	石川	湊	小新	鳥井	田中	中里	伊藤	村永	小林	鈴木	武富	上野	小林	津田	石井	佐藤
↓	↑	↓	↑	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↓	↑	↑	↑	↓	↓

◆先週の動き



主要通貨対円パフォーマンス



◎注意事項
お問い合わせは、取引店の担当者までご連絡ください。当資料に記載された情報は信頼に足る情報源から得たデータ等に基づいて作成しておりますが、その内容については明示されていると否とにかかわらず、弊社がその正確性、確実性を保証するものではありません。また、ここに記載された内容が事前の連絡なしに変更されることもあります。また、当資料は情報提供を目的としており、金融商品等の売買を勧誘するものではありません。取引時期などの最終決定はお客様ご自身の判断でなされるようお願いいたします。

りそな WEEKLY COLUMN

読者への挑戦IX ～ Money Never Sleeps ～

- 読者への挑戦IX
- 休日の歴史 日曜日の休日化と日本における“一六日”
- 祝日と市場流動性 “Money Never Sleeps”?
- 解決編

関西みらいフィナンシャルグループ
ストラテジスト 石田 武

➤ 読者への挑戦IX

【読者への挑戦IX】

ある日、相場の神様の声が聞こえてきました。

“特別に教えてやろう。来週の月曜日から金曜日のどこかで、相場が急落する。ただしそれがいつかは誰にもわからないぞ。”

それを聞いた梶田さん（仮名）は言いました。

「ええー、そんなあ。あ、でも誰にもわからないということは、もし仮に僕がそれをいつか事前に推理できたら、急落はなかったことにしてください。」

“うーむ、たしかに、それではインサイダー取引になってしまうからな。よかろう。”
（よし、これで来週の急落はないぞ）と、梶田さんは内心ほくそ笑みしました。

問①：梶田さんが「急落はない」と判断できた論理的根拠は何でしょう？

問②：梶田さんの機転により、本当に急落は回避できたのでしょうか？

※注：相場情報等、上記以外の情報から急落の予兆は全く感知できないものとします。



➤ 日曜日は何日目？

ある日の私と息子（現在5歳）の会話です。

子「ねえパパ、どうして日曜日はお休みなの？」

私「それはね、神様が6日間で世界を創って、7日目はお休みしたからだよ」

子「ふーん、……でも一週間は日曜日が1日目じゃないの？」

私「……え？」

うーん、確かに、カレンダーでは1番左が日曜日になっている = 1日目が日曜のパターンが多いような気がします。でもそうすると7日目は土曜日？しかし私の記憶では子どもの頃、確かに土曜日は学校に行っていた気がします（1986年生まれです）。上記のストーリーは間違いなののでしょうか？謎は深まるばかりです。

子どもの素朴な疑問から始まった今回の謎ですが、調べてみると（と言ってもWikipediaを読んだだけですが）とても興味深いことがわかりました。一週間のうち何曜日を休むべきかは、宗教によって異なるようなのです。当然と言えば当然のことですが、同じ旧約聖書を正典とするユダヤ教とキリスト教でも見解が異なっており、それが上記の混乱に繋がっているようなのです。



2020/12/1

りそな WEEKLY COLUMN

➤ 安息日と主の日

旧約聖書によると、神様が天地創造の後に休息をとったことに由来し、「**何も行ってはならない**」と定められた日＝安息日は、「**週の7日目**」であり、聖書のなかでの暦であるツアドク暦で、「**週の7日目**」は“**土曜日**”とされております。よって安息日＝土曜日です。ではなぜその後、人々は日曜日（≒安息日）に休むようになったのでしょうか？

実は旧約聖書のみを正典とするユダヤ教の場合は安息日＝土曜日でQ.E.D.なのですが、その後生まれたキリスト教では、イエス・キリストの言葉等をまとめた新約聖書というもうひとつの正典があります。そしてこの新約聖書における重大イベントである**イエス復活の日**は「**週の初めの日＝日曜日**」とされております。それにより、キリスト教ではこの**日曜日**を「**主の日**」として礼拝を行うようになったそうなのです。

➤ 日曜日を休日と定めたのは？

安息日＝土曜日、主の日＝日曜日であり、安息日≒主の日なので、必ずしも日曜日に何もしてはいけない、という解釈とはならないはずですが、それを変えたのが**ローマ皇帝コンスタンティヌス一世**です。彼は西暦321年、**日曜休業例**を發布し、ローマ帝国における休日（≒安息日）を正式に日曜日を定めました。コンスタンティヌス一世は分裂していたローマ帝国を再統一した実力者であるうえ、ローマ帝国の歴史上初めて、キリスト教徒として皇帝になった人物でもあります（それまでローマ帝国はキリスト教を公認しておらず、寧ろ迫害していた時代もありました）。それ故、国内外に対する差別化という意図もあったのかもしれませんが、その後、**ローマ帝国の版図拡大やキリスト教の普及とともに、安息日（土曜日）ではなく、主の日（日曜日）に休むという風潮が世界的に広がっていったものと考えられます**。週休二日制が一般化した現代で、かつ無宗教の方が多く日本ではあまり意識されませんが、日曜日が休日となった背景にはこういったストーリーが隠されていたようです。



➤ 日本における休日の歴史

ちなみに日曜休業例はもちろん日本は対象範囲に含まれておりませんので、わが国では全く別の休日ルールが適用されておりました。それが「**一六日（いちろくび）**」です。これは毎月「**日付の下1桁が1と6の日**」に休むというルールです。具体的には1日、6日、11日、16日、21日、26日、を指します（日本は1873年まで太陰暦であり、31日はありません）。**4日働いて1日休む、というサイクル**であり、勤勉な日本人にしては意外とまったりした生活ですね。ちなみにこの**一六日の前日が、所謂「五十日（ごとおび）」（5日、10日、15日、20日、25日、30日）になることに気が付きましたか？**日本において現代でも資金決済日が五十日に集中しやすいのは、**五十日＝休前日というイメージが日本人のDNAに深く刷り込まれている**からかもしれませんね。マーケットの世界でも、例えば為替市場では五十日に円売り外貨買い需要が高まりやすいことが、アノマリーとして知られております。

➤ 祝日と市場流動性

ところで**日本は世界的に見ても祝日の非常に多い国**として知られています。先程の一六日は1876年（明治九年）に廃止され、西洋に倣って日曜日を休日、土曜日を半休とする制度が確立されると、勤勉な日本人はそれ以外の日にはほとんど休まなくなってしまう。日本が祝日が多い背景には、休むならみんなで休みましょう、という意識が

2020/12/1

りそな WEEKLY COLUMN

あるのかもしれませんが。ところがここに弊害もあります。みんなが休む日はもちろん取引所も閉まってしまい、マーケットでの売買ができなくなってしまうのです。現在の高度にグローバル化した時代において、**祝日が多いという事実は市場の流動性の観点から大きなハンディキャップ**となってしまいます。例えば直近では**米国の大統領選が1日早かったら、東京市場は「文化の日」で休場**となってしまい、**開票時間中というゴールデンタイムの取引がアジアが他の市場に流れてしまっていた**でしょう。金融都市として地位向上を目指すうえでは非常に大きな問題です。

➤ Money never sleeps

ちなみに今回のタイトル“Money never sleeps”はウォール街におけるマネーゲームを描いた名作映画「Wall Street」においてマイケル・ダグラスが演じた伝説の投資家ゴードン・ゲッコーの台詞です（続編の副題でもあります）。現在**日本取引所グループでは大阪取引所における先物取引を祝日も可能とするよう制度変更を進めている**そうです。金融市場に身を置く一員としては市場流動性の向上を前向きに捉えたい一方、「あれ、休めなくなっちゃう？」と考えてしまうのは、やはり日本人の性でしょうか。

【解決編】

問①：仮に**木曜日まで株価の急落がなかったとすると、その時点で金曜日に急落することが分かってしまう**ので、「予想できる」＝急落はない、ということになります。同様に水曜日まで急落がなかった場合、木曜日か金曜日に急落することになりますが、上述の通り金曜日に急落することがないと分かっているので、木曜日で確定となります。すると同様に、「予想できる」＝急落はなくなります。同じように水曜日、火曜日、月曜日と遡っていくと、**結局どの日にも「予想外の急落は起こり得ない」と推論**できます。

問②：①で論理的には「予想外の急落は起こり得ない」と結論付けられました。ということは、**逆に言えば、どの曜日に急落したとしても『予想外の急落』**となってしまいます。つまり結局のところ、急落する曜日を予想することはできないため、株価の急落を避けられたとは言えないのかもしれませんが。なんだかこんがらがってきますね。

今回の問題は一般的に「**抜き打ちテストのパラドックス**」と呼ばれています（原典では「株価の急落」ではなく「抜き打ちテストの実施」となっています）。抜き打ちテストはできるのか？できないのか？数々の学者がこの問題に挑んできましたが、未だ決定的な解決には至っておりません。ただ一つ言えることは、**株価の急落はいつ何時起こるかわかりません**ので、強気相場のなかでも備えは怠らないようにしておきたいものです。

以上

解決編



参考文献：

『Newton別冊 絵でわかるパラドックス大百科』
高橋昌一郎/監修
株式会社ニュートンプレス

また、安息日、一六日等に関してはWikipediaの記述を参考にしております。